ピアノアンサンブルの初学者への効果

―２台ピアノ作品から修得できることについて―

村木洋子*、白日歩*、野口舞*、菊地原冴子*

要　約

ピアノの基礎学習は単純な反復練習の積み重ねで、かなりの忍耐が必要となってくる。その初学者の演奏にもう1台のピアノでの演奏が加わると、難易度の高いスケールの大きい曲にふくらみ、一人では味わえない達成感を感じることができる。２台ピアノで演奏するために作曲された教育作品や古典派の楽曲を分析し、その効果や指導の要点を整理した。そのことを反映させて「ちょうちょう」「ひらいたひらいた」を２台ピアノ用に編曲し考察した。

キーワード：ピアノ、２台ピアノ、ピアノアンサンブル

１．はじめに

（１）研究の目的

本研究では、２台ピアノのための作品の演奏表現効果、独奏曲との比較、また１台のピアノを２名で演奏する連弾との共通点や相違点を明らかにする。教職課程に在学しピアノ実技を履修する大学生で、既に独奏曲を自由に演奏できる上級者と、入学してからピアノの練習を開始する初学者それぞれが抱える問題点にも着目し、独奏曲だけでは得られない効果を整理し、初学者の教育に活用できる教材の開発に結び付けることを目的とする。

（２）研究方法

本研究では文献調査、演奏実践、教材編曲を互いに関連付けて研究を深めた。

２．２台ピアノ作品について

（１）楽器の特性

ピアノが「楽器の王」と呼ばれる理由は様々ある。１台でフル・オーケストラにも比肩する音域の広さと音量、88の鍵盤は同時に数か所押すのみであらゆる和音を生み出し、誰が弾いても常に正確な音程が得られ、足元のペダルを踏み込めば瞬時に音色を変えることもできる。演奏する際は概ね座奏、場合によっては立奏することもあるが、いずれにせよ楽器に触れるのはほぼ指先と足先のみなので、無理な体勢を取る必要も無く身体に負担をかけずに演奏が可能である。

１台あればメロディーとハーモニーを同時に奏でられるピアノは、一人だけで音楽を完結できる楽器であり、ソロ楽器の筆頭と見なされている。実際、ピアノの演奏を学ぶ場合はまず独奏曲の指導から受けるのが一般的であり、連弾曲はその後の課題となる。まして２台ピアノ合奏などは全く触れずに終わる学生も多いのではないだろうか。

比較的頻繁に行われる連弾に比べ、２台ピアノの演奏機会は圧倒的に少ない。その最大の理由は、

（所　属）
＊山梨県立大学

ピアノという楽器を同じ空間に２台設置することの難しさにある。プロ演奏家や音楽教師の自宅ならともかく、一般家庭にはあの大きさの楽器を２台置くスペースが無い。ホールやスタジオ、楽器店などでレンタルする手段が考えられなくもないが、そこに費やさねばならない演奏以外の労力や諸経費を想像しただけで消極的になってしまう。つまりその環境が身近にあり自由に演奏ができるのは稀でありかつ大変幸運ということが言える。しかしながら２台ピアノ曲というジャンルのレッスンによって得られる演奏技術や表現力は決して少なくなく、その教育効果も無視できない。

（２）２台ピアノアンサンブルとは

２台ピアノ（２台のピアノを２人の奏者が弾く重奏の一種[1)]）は、二台四手とも表記されるが、二人の演奏者はそれぞれ１台ずつのピアノを全音域にて活用できるというメリットがある。これはどちらかが低音部もしくは高音部を担当することによって、鍵盤の左や右の半分だけに限定される連弾との大きな違いである。また、連弾の場合は低音を弾く第二奏者が主にペダルを担当するので座る位置や腕の向きなどポジショニングも考えなくてはならないが、これが２台ピアノであれば当然88鍵の中央位置に座ることができペダリングも各々が自由自在となる。

１台より２台の方が音量も豊かになることは言うまでもなく、更に共鳴作用による特別な音響効果が得られる。そこから織りなされる表現はソロ演奏以上にダイナミックであり多くの可能性が広がる。実際に多くの著名なピアニストが「2台ピアノの可能性は無限大」[2)]、「もし、２台のピアノがあって、２人のピアノ弾きがいたら、これはもう絶対２台であわせてみるべき」[3)]、「１台ではできないことが、でき……（中略）……音楽そのものの造形を楽しむことができる」[4)]などと指摘している。

（３）２台ピアノの教育的効果

先に述べた通り、ピアノ演奏はその性質上独奏の形態が最も多いが、それはピアノの長所でもあると同時に短所にもなり得る。一人での演奏が中心ということは、勝手気ままに弾けるということであり、合奏など行う時他のパートナーの考えを感じ取れず、客観性を見失った一人よがりの演奏となりがちである。

対して、２台ピアノは自分の他に、同一の大きさと性能を持つ楽器及びそれを操るもう一人がその場に相対し、これをもってひとつの演奏を創り上げてゆく合奏である。このような場合は常に相方の音を意識して聴きながら演奏しなければならない。このような特殊な聴く力は合唱指導や他楽器との合奏の向上にも非常に有効である。更にこうした経験は独奏の実力向上にもつながっている。

合奏、取り分け「同一楽器同士のアンサンブルでは同調（シンクロ）させること」[5)]が肝要であり、その為には自身のみならず相手の音符もまた常に追うことを求められる。とは言えただ機械的にタイミングを合わせていれば良い訳ではない。作品解釈によって時には協調し、時には敢えて対照的な表現、揺らぎやズレを演出することもある。ひとつの演奏を完成させるまで、互いに主張し尊重し合い試行錯誤を繰り返すことになるだろう。そうした先に、少しずつ当意即妙の勘を見出すのである。阿吽の呼吸で音を使った対話が成り立った時、その演奏は初めて真の調和（ハーモナイズ）に到達する。

加えて面白いのが、これらの過程と結果は、同じ曲目でもパートナーが異なれば一変するということである。相手のアプローチが変われば、自分の演奏もまた変わっても不思議ではない。そこにまた新しい発見と面白さがある。

２台ピアノの学習はこのような音楽の幅を広げるという意味でも重要な分野と言える。以上が２台ピアノの学習が必要とされる所以である。

（4）実例その１(独奏曲に２台目のピアノパートを加えた作品について)

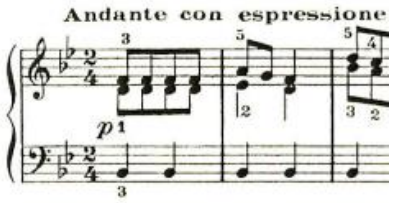
２台ピアノを学習するに際して、どのような留意点があり、それを意識することでどのような効果が得られるかなど、実例をあげて説明する。尚、ここで取り上げる作品はどれも独奏用として書かれたものへ、後づけで第二ピアノパートを加えた形の合奏である。よって第一ピアノは独奏用の楽譜をそのまま使えば良い。

初めから２台ピアノ用として作曲された作品に比べると、難易度や芸術性は低いがそれでも十分なスキルアップが望める。比較的初級向けの教材として独奏版を学んだ生徒が第一ピアノ、指導者が第二ピアノを担当する形から始めるのが適していると思われる。ある程度経験を積んだ後、互いのパートを入れ替えたり、生徒同士で組ませるなどできるとより好ましい。そしていずれは純粋な２台ピアノ用作品、更には演奏会用レベルの名曲にも挑戦することを期待する。

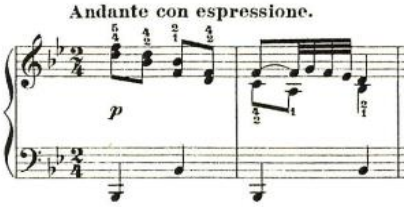
①広範囲な音域

６つの進歩的ソナチネ第４番 Op.36-4　クレメンティ作曲／リーデル編曲[6)]

【譜例１－１】（第一ピアノ１～２小節）



【譜例１－２】（第二ピアノ１～２小節）



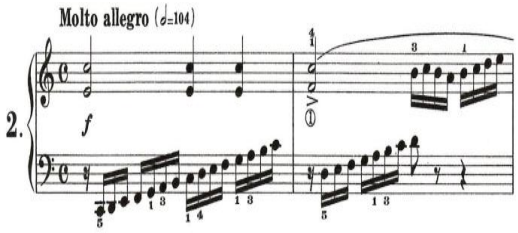
第二楽章冒頭の二小節間を見ると、独奏版では最低音が左手の変ろ音、最高音は右手の一点イ音であり、その音域は２オクターヴ未満となっている。(譜例１－１)　これが２台ピアノ版になると第二奏者の左手の下一点変ろ音～右手は二点ヘ音まで3オクターヴ以上の幅となる。(譜例１－２) 使用される音域はほぼ倍に近い。

このように、第二奏者が加わることによって音域が上もしくは下に増えることは多く、それだけでインパクトも増す。ただしその際には互いの音量バランスを考えるべきである。今回のケースでは、第一奏者のやや狭い使用音域が第二奏者のより広い使用音域に完全に内包されている。独奏と同じような感覚で両者が弾いたなら、メインである筈の第一奏者の音は高低両側から第二奏者の音にかき消されてしまうだろう。その音量配分が上手く取れれば第二奏者の広い音域に支えられて第一奏者の音が浮かび上がり、より立体的でダイナミックな表現となれる。

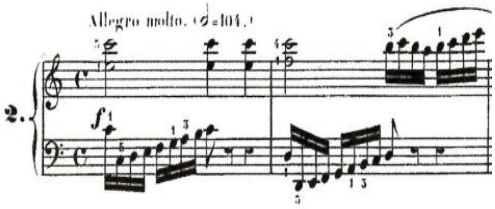
②技巧の強化

40番練習曲 第２番 Op.299-2　ツェルニー作曲

【譜例２－１】（第一ピアノ１～２小節）[7)]



【譜例２－２】（第二ピアノ１～２小節）[8)]



演奏技術上達の為に欠かすことのできない練習曲だが、その地味で単純な作業のため、練習に挫折してしまう生徒も少なくない。そのような時には視点を変えて遊び心を加えて２台ピアノ曲として取り組むのもひとつの方法である。

２台のピアノのための速度練習曲 Op.299b は第二ピアノ用にツェルニー自身が作曲した。

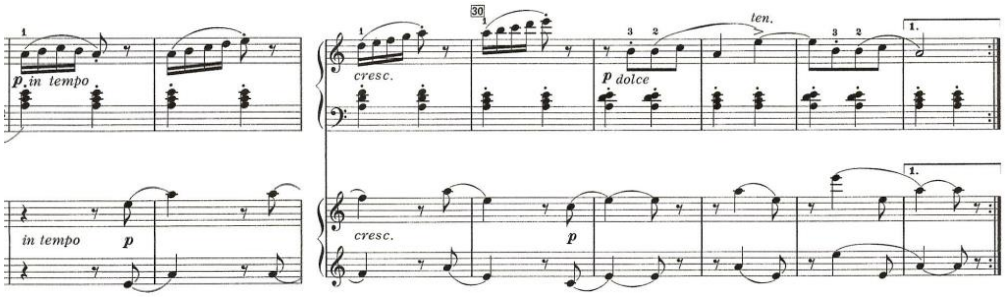
第一奏者は40番練習曲を独奏版のまま弾くのだが（譜例２－１）、第二ピアノもほぼ同等同量の音符を演奏するので（譜例２－２）２台合わさると相当の迫力になる。しかも細かなパッセージを速いテンポで突き進んでゆく作品が多い。ほんの少しのズレでも目立つので自分にとって不足しているテクニックに気付きやすく、基礎力を見直す良い機会にもなる。十六分音符などの細かな音の全てを揃えるには打鍵の基礎から見直してゆかなくてはならないが、独奏だといささか単調で面白味に欠ける印象のあった練習曲も、スピーディーで豪華な合奏を目指す中でなら多少の楽しみも増すのではないだろうか。

ここまで①と②で載せた楽譜は所謂パート譜型で、第一ピアノも第二ピアノも自分の弾く音のみを集中して見られる。２台ピアノ合奏の初歩ならばこうした楽譜を使用して良いだろう。ただ、この段階から相手の楽譜を確認し試弾してみるなどの学習をすることも大切であろう。慣れてきたら両者のパートが上下段に記されたフルスコア型の楽譜も使ってもらいたい。ページ数が増えるので譜めくりの負担はあるが、縦並びになっているので相手が何を弾いているのか一目瞭然であるしお互いのパートへの書き込みもしやすいなどのメリットがある。

③呼吸の取り方

25の練習曲 アラベスク Op.100-2　ブルクミュラー作曲／フランク編曲[9)]

【譜例３】（27 ～ 34小節）



小気味良いリズムと快速なテンポはこの曲の魅力のひとつと思うが、一方で音の粒を揃えることや一定の速度を保つことが難しい。成長に伴う指の筋力や技術は一朝一夕で手に入れることはできないが、拍子感に関しては訓練でかなり変えられる。すなわち、裏拍への意識である。

曲中でポイントになるのは八分休符であり、これが配置されているのはほとんどが裏拍なのである。そこへの意識が薄い故に休符が詰まって全体が前倒しになりテンポが倍速に近いところまで崩れていってしまうケースを多く見てきた。

今回の２台ピアノ版では第二奏者が二拍の裏で八分音符を弾いている部分が多くあるので、（譜例３）第一奏者が早駆けしそうになった際にはストッパーにもなり得る。

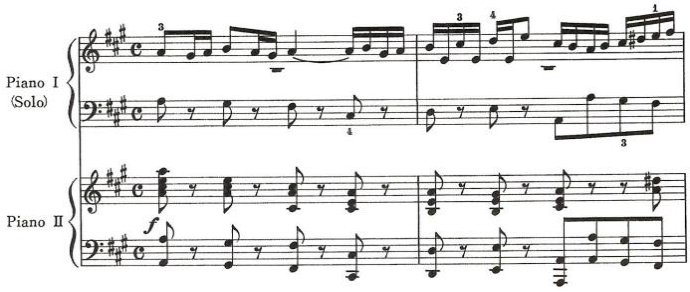
第一奏者はメインであっても常に相手の音を聴き、融合した音楽を目指すべきである。自分一人のタイミングだけで弾けないという事例はアンサンブルやコンチェルトで他のメンバーが前奏を担当しているケースを考えれば最も分かりやすい。このアラベスクなどもピアノコンチェルト風に編曲されておりそこには新しく前奏がつけられている。オーケストラの前奏を無視して弾き始めるソリストは

いないだろう。

④和声の充実

シンフォニア 第12番 イ長調 BWV 798　J.S. バッハ作曲／間宮芳生編曲[10)]

【譜例１】（１～２小節）

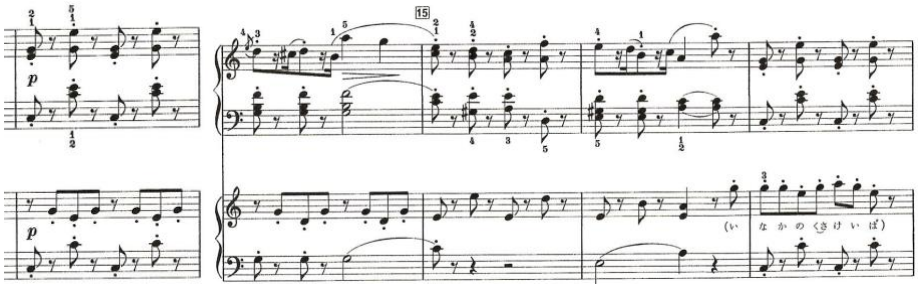


３声シンフォニアを学ぶくらいの生徒であれば少なからず和声についても指導を受けていると思われる。冒頭部分からイ長調のⅠ→Ⅴ→Ⅵ→Ⅰ→V_7→Ⅰに移り変わってゆく和声（譜例４）を感じて弾くべきだが、独奏版は単旋律のみで書かれている。対して第二奏者の譜は和音によって構成されているので２台ピアノ版だと和声進行が明確になる上に演奏も華やかになる。

⑤複雑化する旋律

25の練習曲 貴婦人の乗馬 Op.100-25　ブルクミュラー作曲／フランク編曲[11)]

【譜例５】（13 ～ 17小節）



第二奏者の譜面にフォスター作曲の≪草競馬≫の一部が見られる。（譜例５）

ちなみにこの≪貴婦人の乗馬≫二台ピアノ版には、他にも≪めんこいこうま≫や≪おうま≫など、馬をテーマにした各曲からのワンフレーズが散りばめられている。こうした演出をどう聴かせるかはひとえに奏者達のアイディアと表現力にかかっている。

独奏ピアノ曲に２台目のピアノパートを加えた作品についてまとめ

①～⑤までの各例をあげてきたが、いずれにおいても２台ピアノでは個人技術の研鑽をする以上に双方が互いの音をより深く聴くことが肝要である。

そしてコミュニケーションを取ることも欠かせない。二者の音楽がどのように絡み合って、どのようなバランス関係があるのかを考え、言葉・呼吸・音などありとあらゆる形で対話する。アンサンブルである以上、「多彩な音色」「共演者の音への集中」「自分のパートへの責任」「ハーモニーを形成することによる表現の幅の広がり」[12)] などはどれも一人では成り立たない。初めは思うようには噛み合

わなかったとしても真摯にかつ納得ゆくまで向き合えば、相手からは必ず「互いに補い合い、学び合えるところ」[13] を見出せる筈である。

（５）実例その２（２台ピアノ用アンサンブル作品―古典派時代の作品）

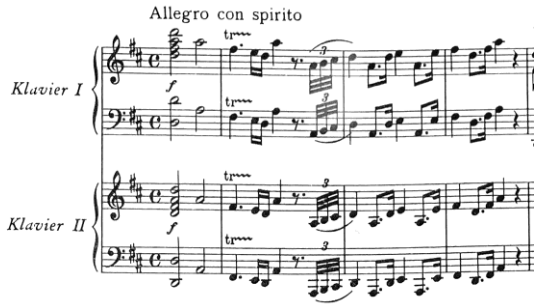
まず２台ピアノ作品の誕生と変遷について述べる。高音から低音まで幅広い音域を持つピアノは、独奏楽器として多彩な表現ができる故に、時としてオーケストラ作品を再現することにも用いられる。音の高低だけでなく、打楽器のような鋭いリズム感、弦楽器のような柔らかさ、管楽器のような艶のある音色など、ピアノによって幅広い表現が可能である。そのピアノで二人の奏者によって演奏される「連弾」という合奏スタイルは、18世紀初頭から広く親しまれていた合奏である。この時代の鍵盤楽器はチェンバロ、スピネット、クラヴィコードなどと呼ばれ、現代のピアノとは構造がかなり異なっていた。弦を爪のようなものではじいて音を出す発音原理で、音は即座に減衰し、強弱は表現しづらい。よって豊かな響きを生み出すことは難しく、家庭的に楽しまれることがほとんどであった。鍵盤数も現代のピアノより少なく、比較的窮屈な形で鍵盤の前に座るため、奏者の手のポジションに多少無理が生じることもあった。バランスに細心の注意を払いつつひとつの音楽として昇華させることは大変緻密な作業であり、息の合った演奏が求められる。

それに対し、２台のピアノを用いた合奏では、広い音域を同時に奏でることができるため、音に厚みが増し、より迫力のあるスケールの大きな音楽表現が可能となる。18世紀後半になると、ハンマーが弦をたたいて音を出す発音原理である「フォルテピアノ」が台頭しており、先述のチェンバロなどに比べると現代のピアノにかなり近い構造となっていた。鍵盤の数も増え、豊かな響きを生み出すことができるようになり、多くの作曲家がこの楽器の発展とともに名作を生み出していくこととなる。モーツァルト（1756-1791）は、独奏や連弾の作品の他に、当時まだ珍しかった２台のピアノのための作品も作曲した。代表曲の「モーツァルト：２台のピアノのためのソナタ K.448」の分析を記す。

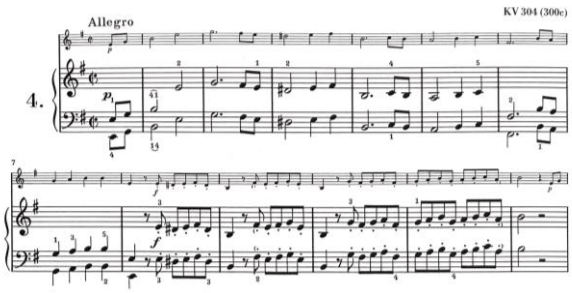
【第１楽章 Allegro con spirito　ニ長調】

堂々とした華やかな、２台のユニゾンによる４小節の主題提示で始まる[譜1]。４オクターブにわたる厚みのあるユニゾンは迫力のある演奏効果を生む。当然ながらそのバランスに気を遣うところではあるが、トリル（装飾音）を含めたユニゾンをぴったりと合わせること、付点音符への機敏なリズム感がそろっていることも肝要である。

譜１）



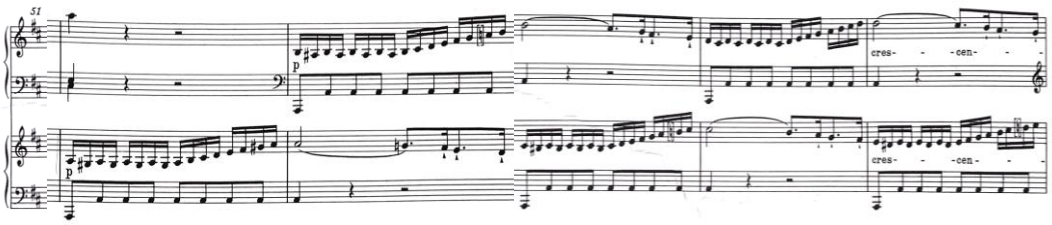
譜２）



モーツァルト作品においては、主題などのモチーフをユニゾンで奏することは頻繁にみられる。このソナタより４年前、1778年に作曲された「ピアノとヴァイオリンのためのソナタ K.304ホ短調」[譜2] も、ピアノとヴァイオリンのオクターブ違いのユニゾンで第１楽章が開始される。12小節間はりつめた緊張感をもって奏されるこの短調の第１主題は、大変美しく印象的である。

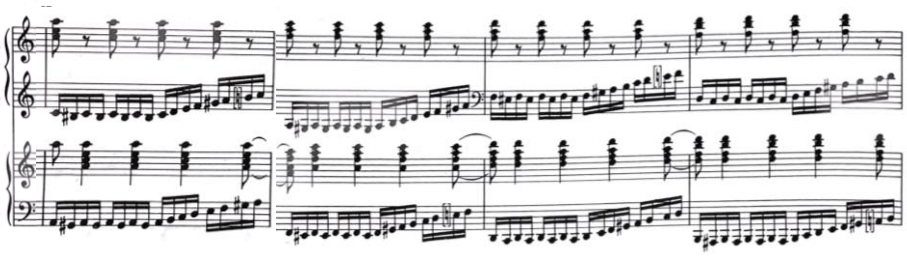
第２主題は対照的に優しい雰囲気のもので、両奏者の音のやり取りは愛らしく、楽しい。第49小節目[譜3)]からは、両奏者の右手16分音符の掛け合いにより上行していく。

譜３）



さらに第55小節目[譜4)]からは左手に移って３度違いのユニゾンとなり、一気に駆け上がっていく。

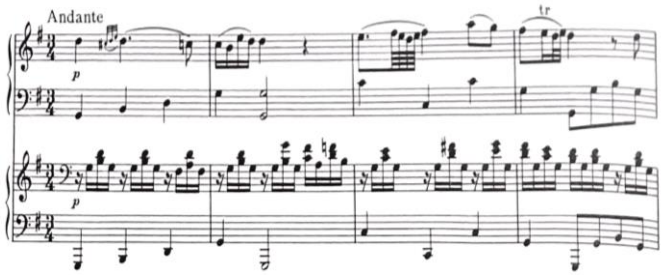
譜４）



この16分音符の正確さは演奏上特に神経をはらう箇所であるが、充分に息を合わせてたたみかけることで緊張感と大きな盛り上がりが生まれる。さらに、８分音符の刻みを生き生きと軽やかに演奏することでより躍動感を感じやすくなるため、16分音符の難しさだけにとらわれることのないよう充分注意する。

【第２楽章 Andante　ト長調】

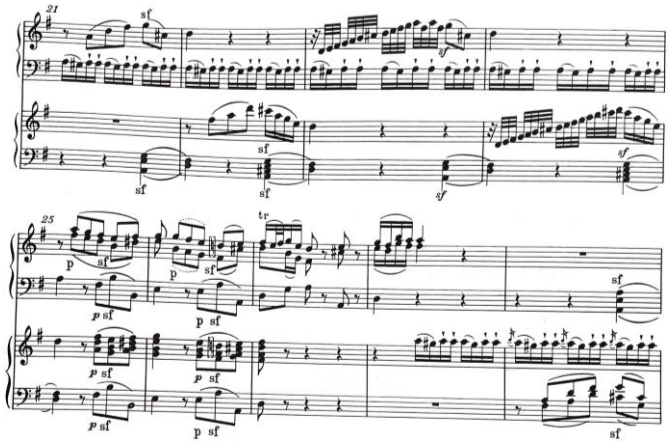
譜５）



打って変わって、優美で歌唱的な楽章である。第１主題[譜5)]は第１ピアノが主導するが、その後は両奏者による美しいやり取りが続いていく。

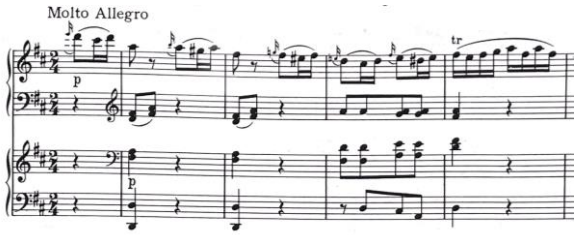
ここ[譜6)]では、音型を変化させながら交互に発展し呼応し合い、一つの旋律を形作っている。旋律と伴奏形のバランスによく気を配る必要がある。

譜６）



【第３楽章 Allegro molto　ニ長調】

譜７）



アウフタクトで始まる第１主題[譜７)]が第１ピアノから始まり、やがて８小節目からは両奏者オクターブ違いのユニゾンで奏される。装飾音の一種であるターンのモチーフが連続して主題を作っている。トルコ行進曲（ピアノソナタ K.331第３楽章）の冒頭のモチーフをちょうど逆にしたような主題である。様々な表情を持ったエピソードにより変化に富んだ曲想で、２人の奏者の掛け合いが目まぐるしく展開される。明るい生気に満ち溢れた躍動感のある楽章である。

【全楽章の楽曲分析のまとめ】

全体を通して、主要主題以外にも両奏者がユニゾンで動く部分が多い曲である。モーツァルトの時代に台頭していたフォルテピアノの特性を充分に理解して演奏することが肝要で、特筆すべきはその音の粒立ちの良さ、明るくカラリとした響きの明瞭さで、これをもとにモーツァルトが作曲したということを常に念頭に置いて演奏すべきである。現代のピアノで弾く場合は、その響きの豊潤さで覆いつくしすぎることのないように、タッチや響き、ペダリング等の工夫が肝要である。ユニゾンで息を合わせるだけでなく、それぞれの個性のぶつかり合いを楽しむような場面もみられ、まさに２台ピアノ演奏の醍醐味といえる。

３．「ちょうちょう」「ひらいたひらいた」２台ピアノ用編曲作品について

「ちょうちょう」「ひらいたひらいた」は教職課程の学生は必ずと言っていいほどピアノで練習する楽曲である。初学者でも歌いながら両手でピアノを弾けることが要求される。地道な練習を積み重ねる孤独な作業だけでなく、上級者または教員がもう１台のピアノで伴奏やアレンジされた音楽を

加えることにより、曲が豊かになり達成感を感じ練習意欲も増す。たとえば編曲Ａ・Ｂの第二ピアノは、規則的なリズムパターンであり、初学者にとってもテンポの維持の助けとなり、アンサンブルすることによりより弾きやすくなることを想定している。一方、編曲Ｃ・Ｄはリズム、拍子とも複雑になり、また和声進行も本来の楽曲とも違いよりダイナミックな曲に仕上がっている。

たとえば「ちょうちょう -C」の第二ピアノはより複雑な和声によって構成されている。習熟度の高い学生にとってより複雑な伴奏を学ぶ機会になる。一つの作品が和声やリズムの変化により様相を変え、奏者及び聴衆に新たな印象を与えることを経験できる。「ちょうちょう -D」は第二ピアノのモチーフとの掛け合いによって作品に物語性が生まれている。より二者が呼応しながら一つの作品を作り上げる面白さを経験する。

「ひらいたひらいた -C」は原曲の持つ穏やかで静かな曲想が和太鼓を思わせる伴奏により一転する。テンポも原曲より速く、和声による色彩の変化を躍動感と共に味わうことができる。「ひらいたひらいた -D」は、第二ピアノによる新たな和声及びリズムとの融合により、新しい作品としての魅力を作り上げている。

４．考察と今後の課題

ピアノ実技の授業では、独奏のほかに、旋律を歌い両手で伴奏する弾き歌い、連弾、２台ピアノと、学びのスタイルを多様化させることにより、中島（2020）の調査のとおり相乗効果があることは、授業担当者として実感している。中・上級の学生には、モーツァルトの独奏曲で和声進行や音楽スタイルに触れた後に、２台ピアノ作品に取り組むことで、楽曲分析で得られた表現効果をより学生に伝えられることも判明した。

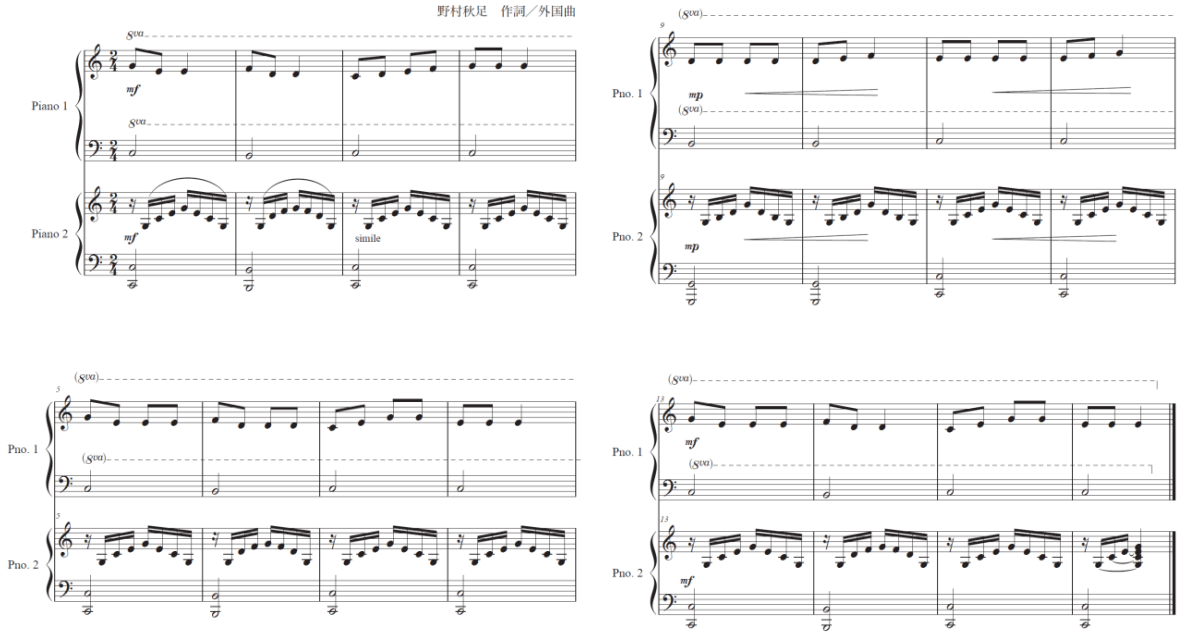
初学者で、童謡や唱歌の旋律をやっと弾けるようになった学生に、教員が即興でもう１台のピアノを加えると、単純な旋律に重厚な和声が加わり別の曲に生まれ変わったかの印象であったと、授業アンケートに回答があった。

限られた時間で最大の練習効果を引き出すためにも、２台ピアノを活用した授業の展開を継続したい。今後は「ちょうちょう」「ひらいたひらいた」の編曲作品を学生の習熟度に合わせて選択し、２台ピアノを併用して練習することの利点を調査し続けたい。

編曲作品【ちょうちょう】

ちょうちょう-A

野村秋足　作詞／外国曲

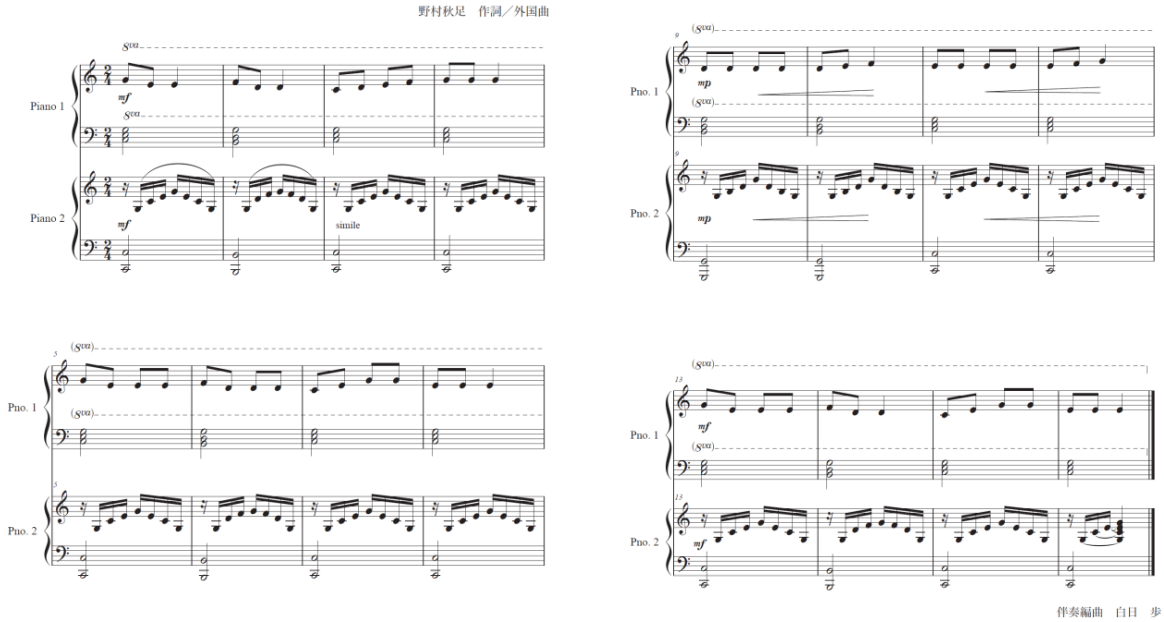


伴奏編曲　白日　歩

MEMO
Piano1の右手は原曲のメロディーを１オクターブ上で弾く。
一人で練習する時は両手共に記譜より１オクターブ下げて弾く。

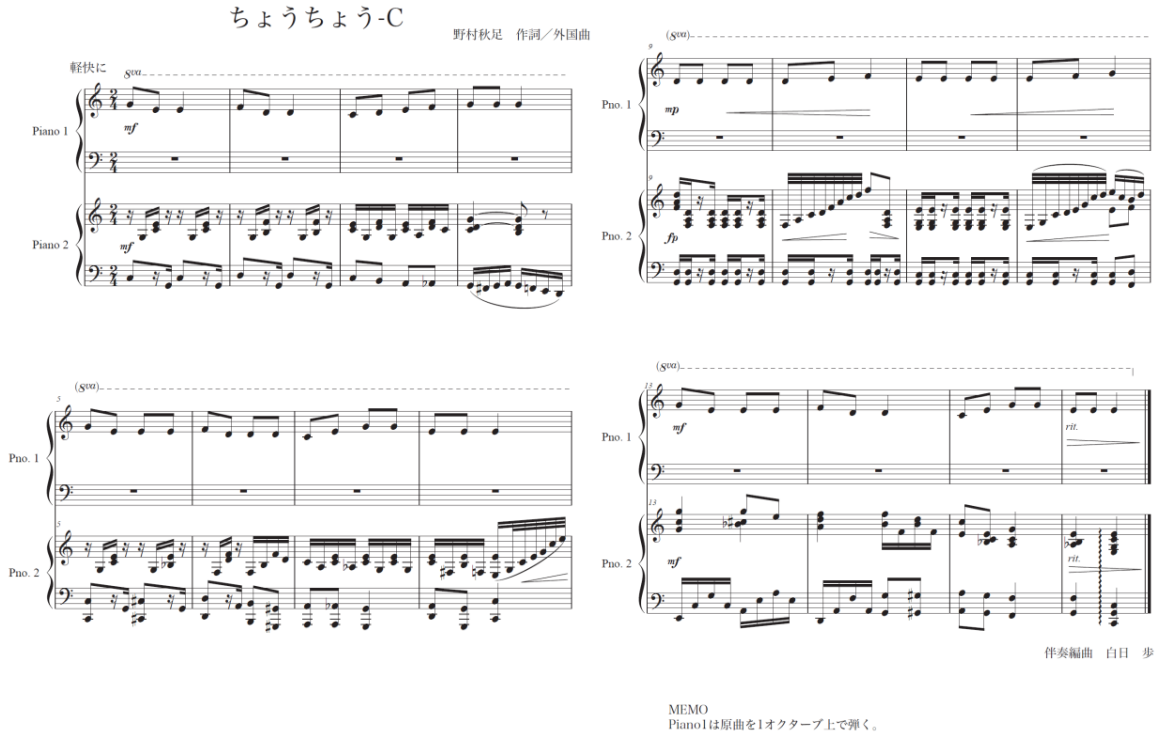
ちょうちょう-B

野村秋足　作詞／外国曲

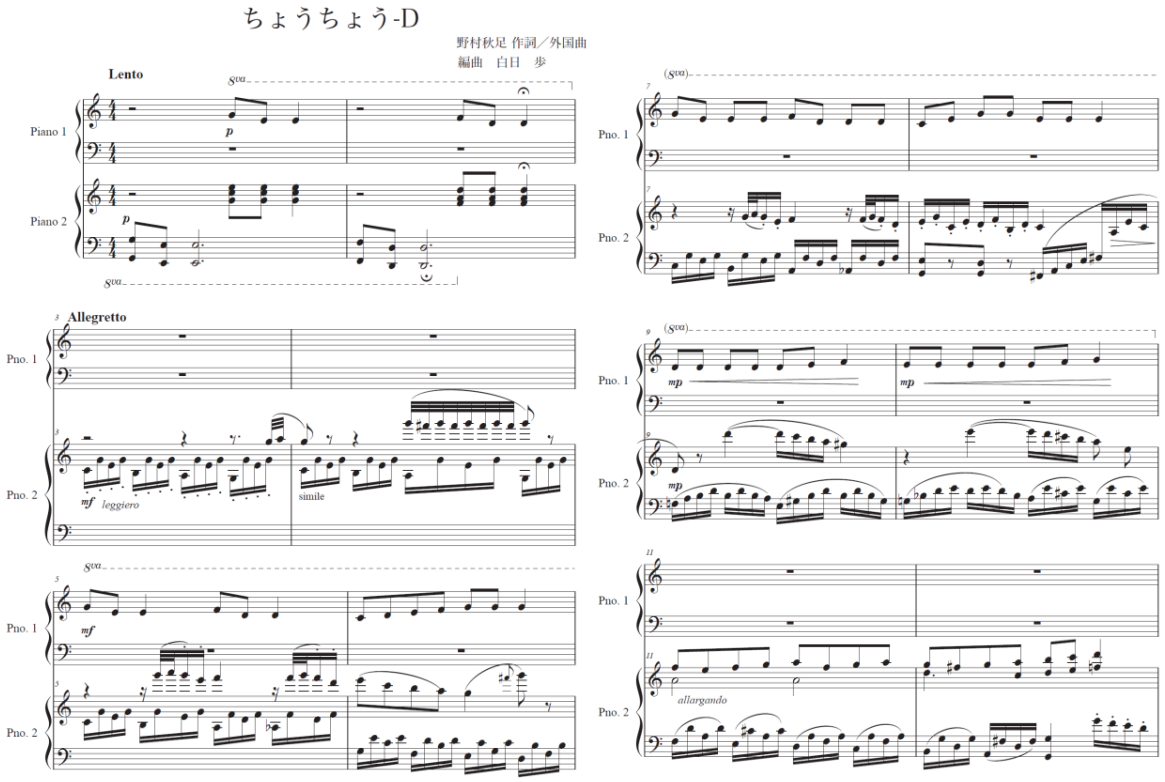


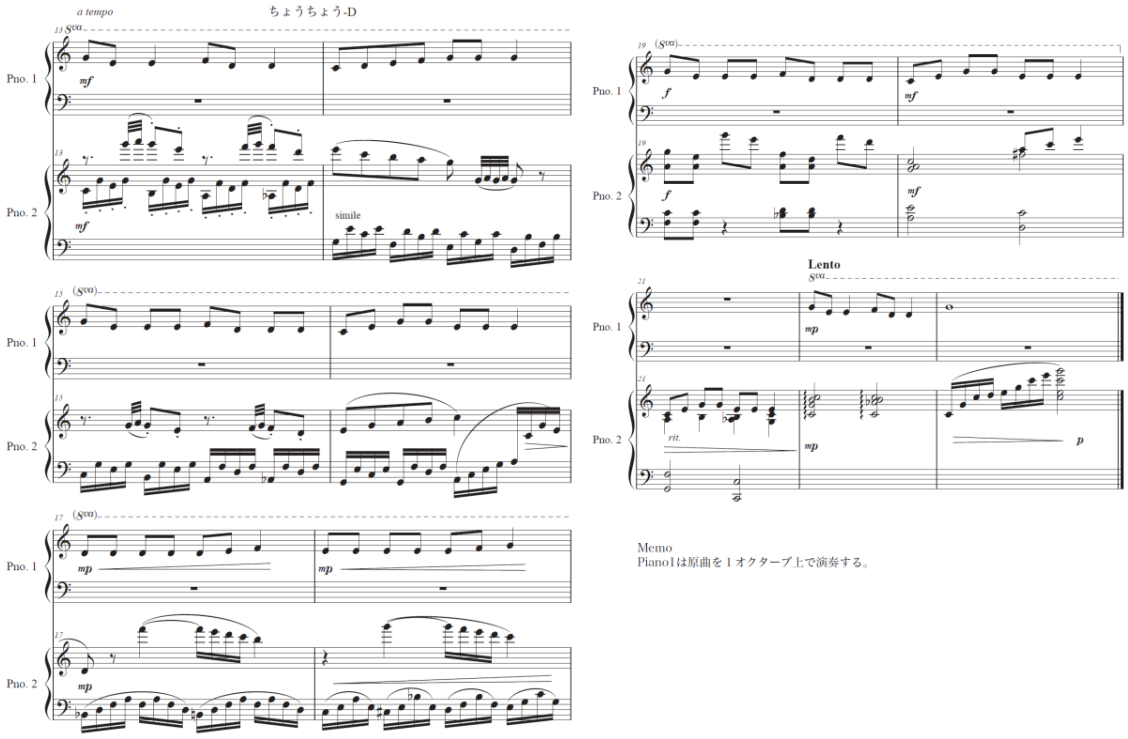
伴奏編曲　白日　歩

MEMO
Piano1の右手は原曲のメロディーを１オクターブ上で弾く。
一人で練習する時は両手共に記譜より１オクターブ下げて弾く。

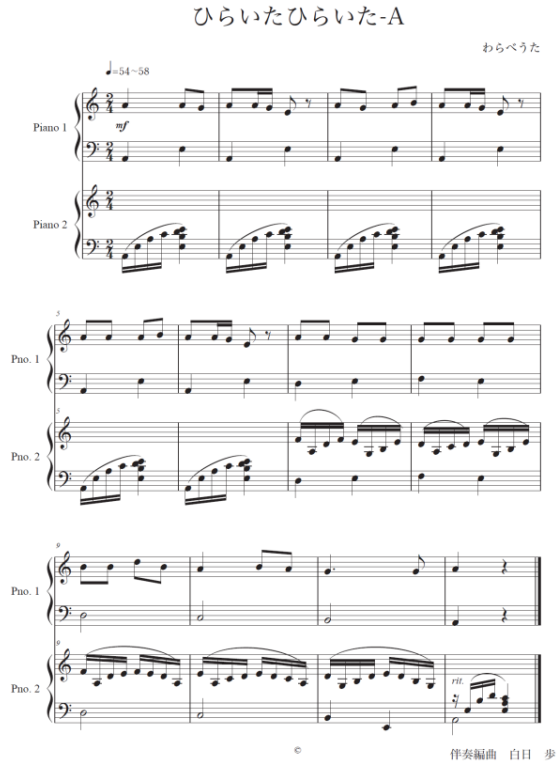


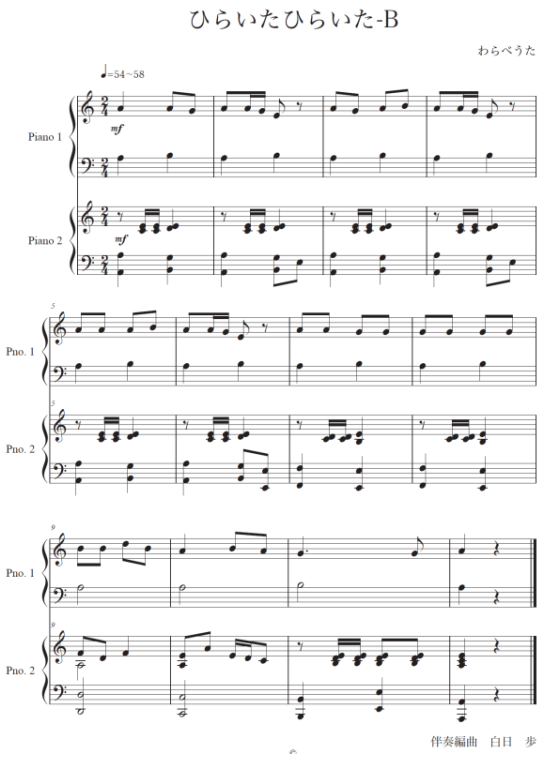
MEMO
Piano1は原曲を1オクターブ上で弾く。

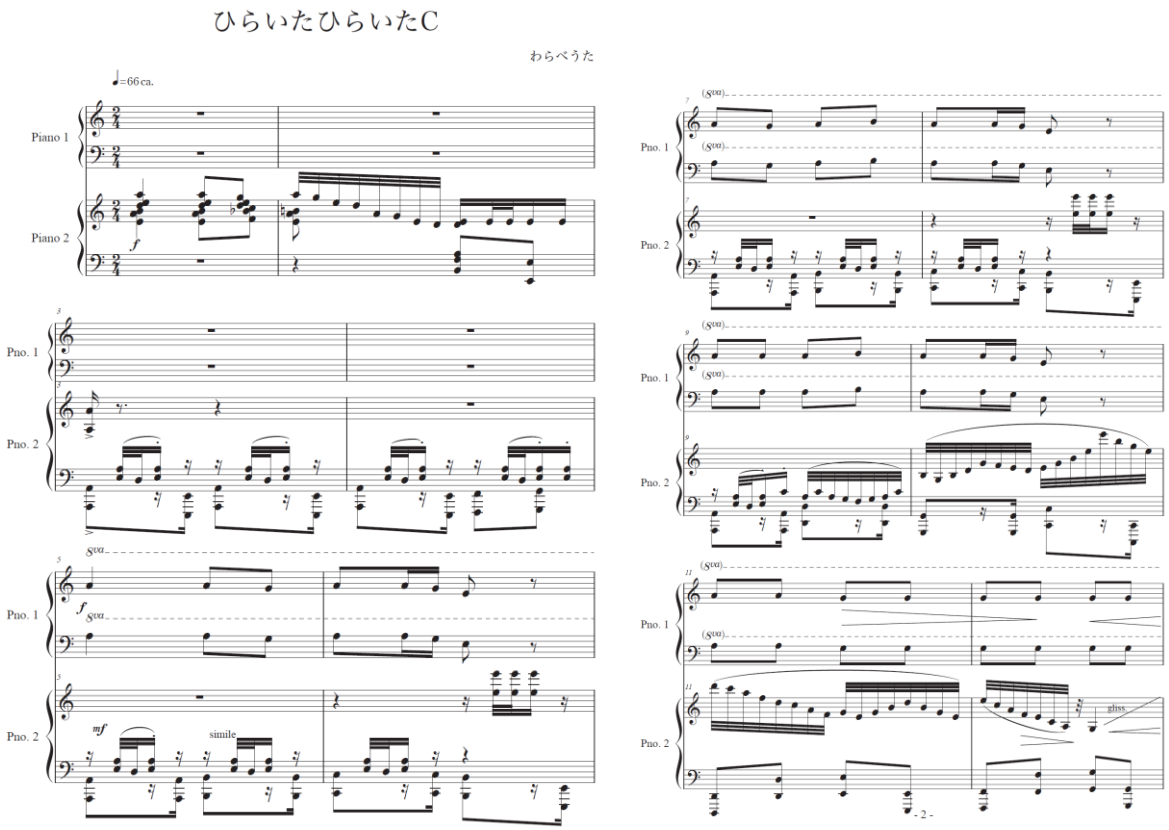


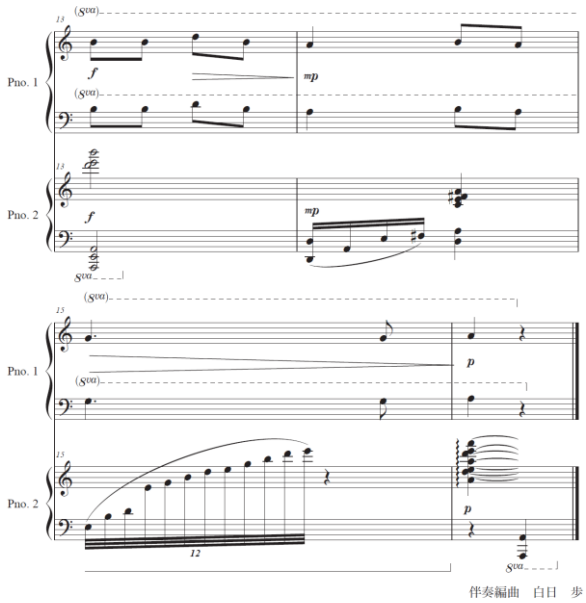


編曲作品【ひらいたひらいた】









MEMO
Piano1は右手のみを原曲の1オクターブ上で弾く。あるいは左手でオクターブ下の音を加えて弾く。

ひらいたひらいた-D

わらべうた
編曲　白日　歩

♩=50~60

Piano 1
Piano 2
Pno. 1
Pno. 2

MEMO
Piano1は右手のみを原曲の1オクターブ上で弾く。

引用文献

1）ウィキペディア　https://ja.wikipedia.org/wiki/
2）仲道郁代監修『エンジョイ！ ピアノデュオ』全音楽譜出版社 2003年 ６頁
3）同上
4）らららクラブ　松田華音×牛田智大 ２台ピアノ・コンサート https://lalalaclub.com/
5）シャブリエ、アレクシ＝エマニュエル『狂詩曲≪スペイン≫、3つのロマンティックなワルツ [２台ピアノ]』　服部真由子、横山歩校訂　プリズム 2009年 ２頁
6）クレメンティ、ムツィオ『クレメンティ＝リーデル ２台のピアノのためのソナチネ』　西村昌樹校訂　ミュッセ（Musse.jp）2011年 14,16頁
7）ツェルニー、カール『40番練習曲（解説付）』田村宏校訂　全音楽譜出版社 1962年 19頁
8）IMSLP 国際楽譜ライブラリープロジェクト ペトルッチ　https://imslp.org/wiki/Category:Czerny,_Carl
9）ブルクミュラー、ヨハン・フリードリヒ・フランツ『２台のピアノによる――ブルグミュラー25の練習曲』ハンス・フランク編曲　全音楽譜出版社 1976年 ９頁
10）江崎光世監修『リトル・ピース・コンチェルト』学研 2009年 62頁
11）ブルクミュラー、ヨハン・フリードリヒ・フランツ『２台のピアノによる――ブルグミュラー25の練習曲』ハンス・フランク編曲　全音楽譜出版社 1976年80頁
12）江崎光世監修『リトル・ピース・コンチェルト』学研 2009年 ２頁
13）SPICE　反田恭平が語る、オンデマンド・コンサート～『Hand in hand』https://spice.eplus.jp/

編曲原譜

・《ちょうちょう》財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構編『母とおさなごの歌』全音楽譜出版社 2016年　６頁
・《ひらいたひらいた》有本真紀／阪井恵／山下薫子編著『小学校教員養成課程　小学校音楽科教育法』教育芸術社　2011年　88頁

参考文献

・ 中嶋美保「連弾や２台ピアノから得られる効果的なピアノの上達－ソロとデュオ双方の取り組みで見える相乗効果－」『近畿大学九州短期大学研究紀要　第50巻』2020年　107-122頁
・ 岡田暁夫『モーツァルト　よみがえる天才３』筑摩書房2020年　73 – 80頁
・ 中野雄『モーツァルト　天才の秘密』文藝春秋2006年　174 – 183頁
・ 松永晴紀『ピアノ・デュオ作品事典』春秋社1998年　333 – 336頁
・ エファ＆パウル・バドゥーラー＝スコダ 著、今井顕 監訳『モーツァルト　演奏法と解釈』音楽之友社2016年　634 – 636頁
・ 下田幸二『月刊 レコード芸術2015年8月号』音楽之友社2015年　228 – 229頁
・ 一般社団法人全日本ピアノ指導者協会　http://www.piano.or.jp/

Effect of Piano Ensembles for Beginners in Learning the Piano
-What can be learned from two-piano works-

Yoko Muraki *, Ayumi Shirakusa *, Mai Noguchi *, Saeko Kikuchibara *

Summary

Piano lessons for beginners usually focus on simple repetitive practice and require much patience. Playing duets where a teacher plays along with a beginner student makes the piece more challenging and rich, leading to a sense of accomplishment for the student that could not be appreciated in a solo piano performance. This paper aims to analyze educational works and classical pieces for two pianos and clarify their effects and essential teaching tips. Based on the results, two pieces, "Choo Choo" and "Hiraita Hiraita," were arranged for piano duets and closely examined.

Keywords:
piano, two pianos, piano ensemble

（Affiliation）
＊ Yamanashi Prefectural University